



かつにんけん
活人剣の物語

一・

「ねえねえ齋主さま。あれはなあに？」

あれかい？ あれは『活人剣』かつにんけんじゃよ。

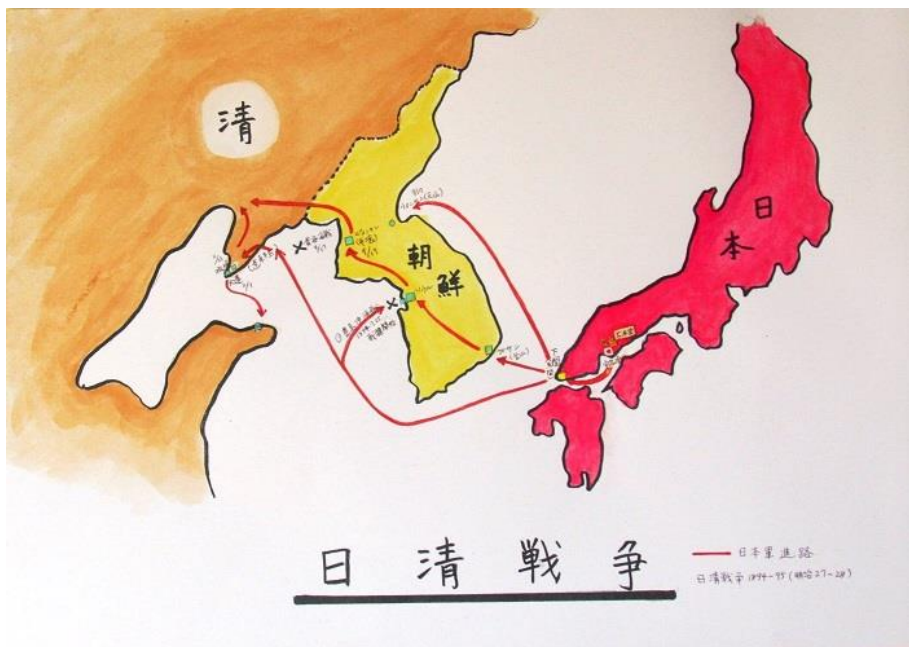
「かつにんけん？ 『活人剣』ってなあに？」

『活人剣』は『人を活かす剣』という意味じゃが、この可睡齋には『活人剣』に
まるわるお話があるのじゃ。

「ふうん…。どんなお話なの？」

「ねえねえ齋主さま。お話を聞かせて？」

よいかな？ これは『活人剣の物語』といって、明治時代のお話じゃ。



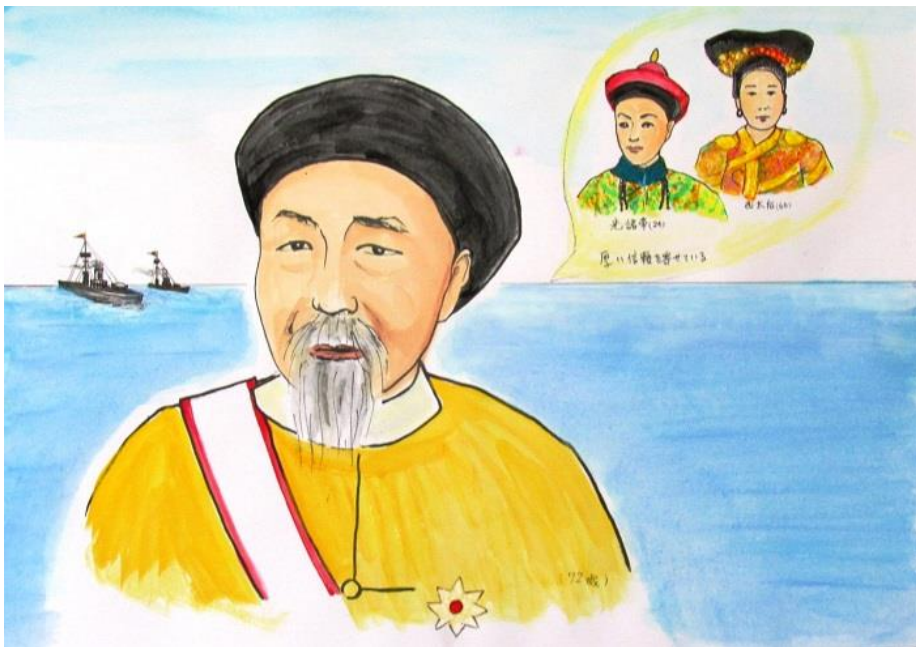
二・

時は一八九五年。明治二十七年七月のことじゃった。
朝鮮半島の支配をめぐるって、日本国と清国（今の中国）との間に戦争が起こったのじゃ。

この戦争で日本軍は清軍を圧倒し、どんどん勝ち進んでいった。

そこで、翌年三月、戦争終結について話し合うため、山口県の下関で講和会議が開かれることになったのじゃ。

※日清戦争 一八九四年七月、一八九五年三月



三・

この会議に、清の代表としてやってきたのは李鴻章りこうしょうという大臣であった。

李大臣は皇帝から全ての権限を任され、軍艦に乗り、百二十人ものお伴を引き連れてやってきた。

七十二歳ながら、その姿は大柄で威厳と気品に満ちておったそうじゃ。



四.

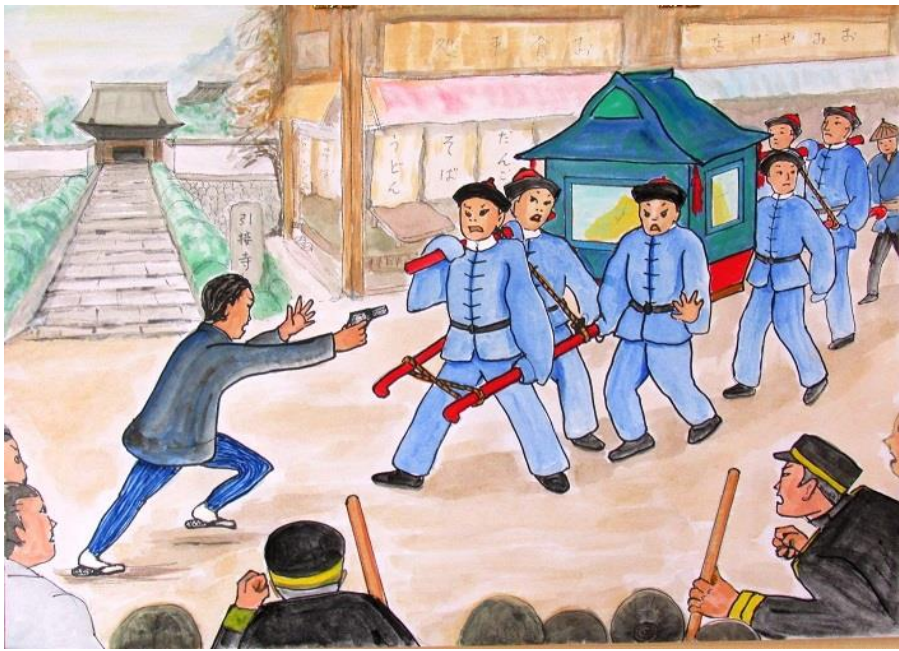
会議が始まった。

戦いで優位な立場の日本は、清の李鴻章大臣に対し、数々の要求を突き付けた。

李大臣は、その厳しさに驚いた。

「日本の要求はあまりにも厳しすぎる！ それでは清の国が滅んでしまう…」
会議は三度行われたが、話はなかなか進まなかった。

しかし、この後、とんでもない事件が起こったのじゃ。



五.

会議を終え、李大臣一行が、宿泊所のお寺へ帰る途中のことじゃった。
輿こしに乗った大臣と、清の行列をひと目見ようと、通りにはたくさんの人達が押しかけておった。

その人だかりの中から、突然、拳銃を手にした若い男が飛び出して来た!!



六。

「パーン！」

あっという間の出来事じゃ。

銃弾は大臣の顔面に命中した！

発砲した男はすぐさま大勢の警官によって取り押さえられた。



七.

「李大臣が撃たれた!!」

情報はすぐさま政府と明治天皇に報告された。

「な、なんということをしてくれたのだ! これは国家を揺るがす大事件だ!!」

明治天皇は、それはもう大変お怒りいかりになられた。

「なんとしても李大臣の命を救わねばならぬ!

大至急、優秀な医師を派遣せよ!」

※政府…大本営



八.

そこで、陸軍軍医総監^{そうかん} 佐藤進^{すずむ} 博士^{はくし}の派遣が命ぜられた。

広島^{ひろしま}の病院にいた佐藤博士^{はくし}は、天皇の命を受け、すぐに速手の人力車へ乗り、広島港へと急いだ。そして、港で待っていた船に乗り込んだのじゃ。

博士^{はくし}は、順天堂という病院の堂主でもあり、当時、日本に最新の西洋医学をもたらした東洋随一の外科医であった。

※第三代順天堂堂主 佐藤進 一八八二年・一九二〇年
(ここまでは、ひっ迫した流れで、テンポを重視しています)



九。

船が下関に向けて出発したのは午後六時。

波はとても静かじゃった…。

(※ここから夜の静けさの中で人物と話の整理を計ります)

「それにしても、本当に愚かなことをしてくれたものだ…」

暮れて行く瀬戸内の海を眺めながら、佐藤博士はつぶやいた。

いくら戦争で優位でも、話し合いに招いた相手を殺すことなどあってはならないことである。

日本は野蛮で卑怯な国だとして、今度は清だけでなく、世界中の国を敵に回すことにもなりかねないのじゃ。

「なんとか命を取り留めていて欲しい…」

佐藤博士は祈った…。



十・

佐藤博士は若かりし頃、のちに可睡齋の齋主となる西有穆山和尚にしありぼくざんから禅を学んだことがあった。江戸時代から明治にかけての混乱期、国内の戦争で傷ついた人々を助けられないことがあまりにも多かった。

当時の博士は自分の無力さを痛感した。

「人を救うために最新の医学を学ぶ必要がある」

そこで一八六九年（明治二年）、ドイツへ留学することを決めた。そして、東洋人として初めて医学博士の称号を手にしたのじゃ。

今、まさにその知識と経験が試される時が近づいていた。

もし、李大臣が命を落とすことになってもなったら、日本の運命も大変な危機に陥ってしまう。責任は重大じゃった。

夜を往く船の中で、博士は眠ることができなかった。



翌朝、船が下関に到着し、博士の診察が許された。

大臣は、奇跡的に命を取り留めていた。

それだけではない。拳銃で撃たれたあと、なんと大臣は、血をしたたらせながらも、自らの足で平然と輿こしから降りてきたという。

しかしまだ安心はできない。銃弾は左目の下に埋まったままである。

博士が傷口に触れると、痛みをこらえて大臣が言った。

「私はもう古いぼれだ。一滴の血も失いたくない…」

「大臣、そんなことをおっしゃらないで下さい。大臣を父親だと思って手を尽くします。どうかご安心下さい」

李大臣はこの言葉に心を動かされ、治療の一切を博士に任せることにした。

容態は突然変わる可能性がある。博士は、昼夜を問わず全ての処置を自らの手でを行い、誠心誠意を尽くしたのじゃった。



十二。

大臣が快方に向かう中、講和会議が再開されることになった。

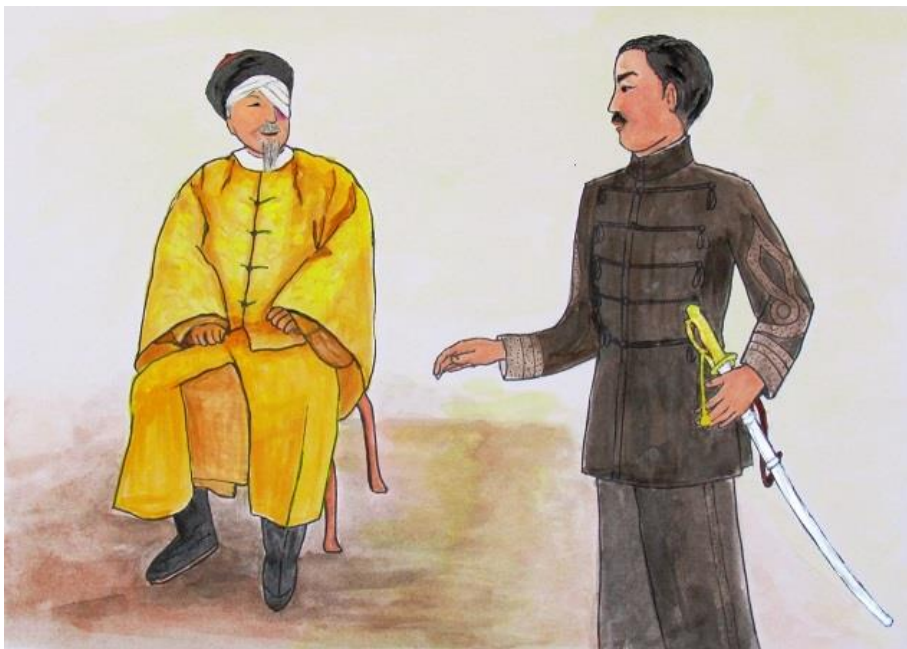
日本はこの事件によって、厳しすぎた交渉態度をやわらげ、清に歩み寄ることとなった。

そして事件から二十四日後、日本と清の間に下関講和条約が結ばれた。

戦争は終わることになったのじゃ。

博士^{はくし}の懸命な治療は、大臣の命を救っただけではなかった。

結果的に、清の苦しい立場、日本の苦しい状況、お互いを救い、活かすことになったのじゃ。



十三・

さて、治療のあいだのことじゃ。二人にこんな会話があってのう。

軍医である博士はつねに軍服姿で、治療中も剣を腰に下げていた。

これを不思議に思っていた大臣は、ある時博士に尋ねたのじゃ。

「医者には必要なのではないか？」

博士はすぐにこう答えた。

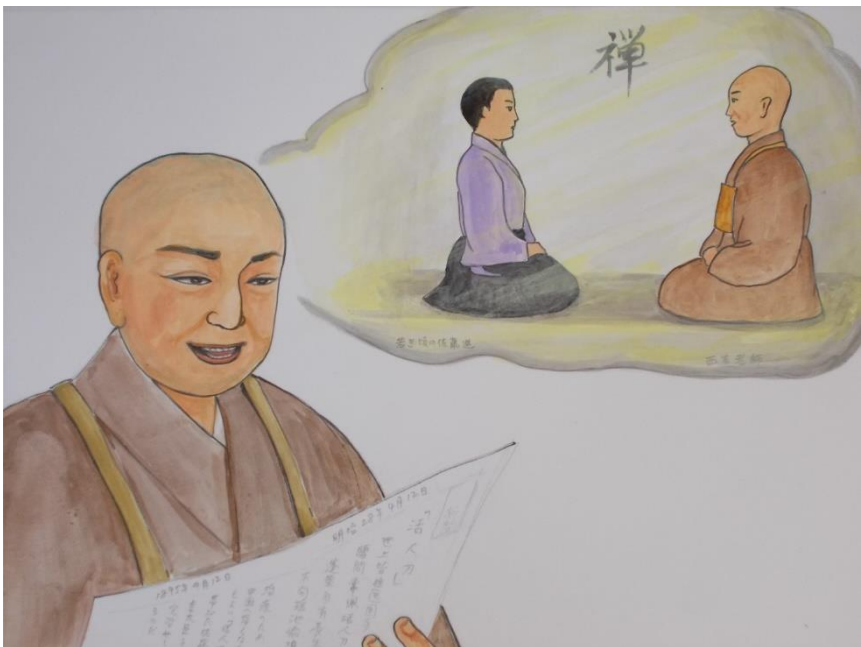
「これは人を殺すための『殺人刀』ではなく、人を活かす『活人剣』なのです。

私は日夜、百の病魔と戦って、必ずこれに勝たなければなりません」

「殺人刀 せつにんとう 活人剣 かつにんけん」これは清に伝わる古い仏教書に書かれているものだった。

博士は清の古い文化である仏教や禅も学んでいる。

大臣は、博士の深い教養に感心した。そして「相手を思いやる心」を重んじていることに大変胸を打たれたのじゃった。



十四・

博士と大臣の言葉のやりとりは新聞に載り、世間で大変話題となった。

この「活人剣」の会話に、誰よりも感銘を受け喜んだのが、可睡斎ひおきもくせんの日置黙仙斎主であった。先代の西有穆山にしありぼくざん老師の後を継いだ日置斎主は、先代から禅を学んだ佐藤博士の活躍を後世に伝えたいと考え、この可睡斎に「活人剣」の記念碑を建てようと決意したのじゃ。

日置斎主は、これを見晴らしのよい「出世六の字穴」のそばに建てることにした。そして、「活人剣」の彫刻を明治の彫刻家として名高い高村光雲たかむらこううん先生に依頼したのじゃ。

「へえ、それがこの活人剣なの？」

いやいや、もう少し話を聞いておくれ。

活人剣の物語はここからなのじゃ。



十五.

活人劍碑が完成したのは、ちょうど一九〇〇年（明治三十三年）のことじゃ。近くには李大臣の感謝の言葉が刻まれた石碑が建てられた。

完成式典には佐藤博士も招かれ、大勢の人たちと七十人あまりの僧侶によって盛大にとり行われた。

活人劍碑は、佐藤進博士の功績と李鴻章大臣の心の広さを称え、また、この戦争で亡くなった人々を供養するものでもあった。敵味方に関わりなく全ての人を供養したのだ。

活人劍碑は、未来に向けた両国の友好と、世界の平和を祈るための大切な大切な祈念碑なのじゃ。



十六。

ところがじゃ。悲しいことに現実には実に厳しいものであった。

日本も、世界も、逆に戦争へと突き進んでいった。

そして、第二次世界大戦が始まり、人類がこれまで経験したことのないほど大勢の人々が犠牲となってしまうのじゃ。

一方、可睡齋の活人剣も厳しい運命にさらされた。

戦争が長引き、日本軍は武器を造る金属が足りなくなった。そこで日本政府は国民に対し、お寺の鐘から台所のお鍋に至るまで、いっさいがっさいの金属を差し出すよう命じたのじゃ。

銅で造られた活人剣も例外ではなかった。

人を活かし、世界平和を願った活人剣じゃが、その剣が、戦争のために溶かされ、人を殺すための武器へと変えられていったのじゃ…。

やるせない話じゃ…。

可睡齋には石の台座だけが残された…。



十七。

それから七十年の月日がたった。

遺された石造りの台はひどく傷んでしまい、訪れる人もない。

日置斎主が生きておられたらどんなに嘆かれたであろうか…。

そんな中、このような声が挙がり始めた。

「このままでは活人剣の物語も、活人剣碑も忘れ去られてしまう」

「傷んだ活人剣碑をなんとかしなくては…」

そして、歴史を次の世代に語り継ごうとする人たちによって、新たな活人剣を創ろうという活動が始まったのじゃ。



十八・

新しい活人剣は、東京藝術大学 みやたりようへい 宮田亮平 学長（二〇一六年より文化庁長官）
によって制作されることとなった。現代金属工芸の第一人者じゃ。

そして、二〇一五年（平成二十七年）九月二十六日、新しい平成の活人剣碑の
完成式が行われたのじゃ。

新しい活人剣碑には可睡齋の代表的な花である牡丹が彫られておる。

牡丹は波となり、日中友好を交わす人々がイルカとなって海を越えてゆく。

海は世界へと広がり、世界中の人々とつながっていく。

剣の先端は、世界平和の願いを天に示しているのじゃ。

「それがこの『活人剣』なのね？」



十九。

そうじゃ。

だから、可睡齋へ参拝の時は、ぜひ眺めの良い明治の活人剣碑の場所にも足を延ばしてほしいのじゃ。そして、お互いの国と人々のために尽くした佐藤進博士^{はくし}と李鴻章大臣^{りこうしょう}、さらには、世界平和を願った日置齋主の思いにも触れてみてほしい。明治の活人剣は武器へと変わった。誰にも止めることはできなかった…。

平成の活人剣碑。

山門横では心を新たに、遠くから、また近くから、これを静かに眺めて欲しい。

活人剣碑は象徴じゃ。

本当の活人剣。それは、みんなの心の中にある。

「えっ？ わたしたちの心の中？」

そう、活人剣は、一人一人、心の中にあるのじゃ。

心の活人剣をどう活かしてゆくか…。

よいかな？ それはあなたの心が決めてゆくのじゃ…。



おわり